

御幸町だより

京都御幸町教会
〒604-0933
京都市中京区御幸町通二条
下る山本町434
TEL・FAX (075) 231-3441

『主よ、水先のしるべし給え』(ヨハネ6:16~21)

牧師 村島 義也

ガリラヤ湖、向こう岸に渡ろうと小舟に乗り込む弟子たちの姿がある。夕となり、既に暗くなっていた。こんな時間に湖に漕ぎ出すのは適当な事だろうか。湖と言っても広い(ガリラヤ湖は「ガリラヤの海」とも訳し得る)。闇は深まり見通しはますます悪くなるだろう。おまけにガリラヤ湖は地形の関係で、時々山おろしみたいな突風が吹き下ろし、ひどく荒れる事があった。

普通は、見通しの利く昼間に出発するものだ。何で弟子たちはこんな夕方、闇が深まっていく頃、揺れる波間に舟を漕ぎ出すのか。彼らは知らな過ぎるか、舟の事～湖の事を。いや、そうではない、彼らの内の幾人かは元ガリラヤ湖の漁師～言わばこの湖のプロなのだ。彼らは小さな兆しから天候を予測する術も心得ていただろう。もしかしたらこの時、彼らは突風もあり得ると承知していたかも知れないのだ。ではなぜその彼らがこんな時間に？ 謎は深まる。

同じ場面を他の福音書はこのように記憶している～弟子たちはイエスに「強いられて」舟に乗り、向こう岸へ向ったのだと…。弟子たちは、自分たちがそうしたわけではないが、そうせねばならなかった。要するにこういう事だ～なぜ色々よく分かっているプロがこんな夕方、見通しの悪くなる頃に舟を漕ぎ出すのか。その謎は、そんな事を始めなくてはならない当の本人たちにも謎なのだ。

けれどこんな事こそまさに我々の人生の様ではないか。人生は自らの意思・思惑で成り立つものではない。良きにつけ悪きにつけ、「意外」も人生に重きを占める要素である。「見通しが明るい」と思う時ほど要注意(詩編30:7f)。我々の人生に対する視野・視界は限られたものである。でなければ「一寸先は闇」などと言う格言は生まれぬ。例えばこの時の弟子たちのように、意図せぬ事態へ押し出されることがある。運命に強いられるようにして暗い波間に漕ぎだしている事がある。そうせざるを得ず。

弟子たちはどうなったか。湖の真ん中辺り、案の定、突風が吹き下ろし湖は荒れ始めた。こうなるともう

目的地どころではない。弟子たちは必死だ、漕いで、漕いで、漕いで～何とか助かろうと。我々にも思い当たる状況だ。ゆっくり座って考えるゆとりはない、とにかく目先の事柄への対処で精一杯、漕ぎ悩みつつも漕がなきゃならない、とにかく漕いでなくちゃいけない。そんな時がある。

けれども主イエスはそんな現実～荒れる波の上を歩いて弟子たちに近付かれた。そして弟子たちの舟の前、すぐその所でこう言われたのだ、「私だ、恐れることはない」。ここに聞こえてくるもう一つの主の言葉がある、「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」。さてそこで「彼らはイエスを舟に迎え入れようとした」とある。つまり彼らは漕いだ、そこの主の方へと。漕ぐ事に目当てが生じた。漕ぐ事が祈りとなった。「神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます」。危機は去らず、岸は遠い。しかし祈りを向わせるべきお方は何時もすぐそこ～主は何時も祈りに近くいまし給う。

弟子たちはそうして祈りの^{かい}糧を回す内、何と不思議な事だろう、「間もなく、舟は目指す地についた。「何処かの岸に辿り着いて助かった」ではない、まさしく彼らは「目指す地」に着いたのだ～主を目当てに漕ぐうち。

先が明るく見える人も、憂鬱な人もいるだろう。しかしいずれも現在が沖に浮かばせる蜃気楼なのであって、実は人には明日さえ定かではないのではないか(ヤコブ4:13~15)。不意な嵐に漕ぎ悩むことがあるかもしれないし、実際その渦中の人もいるかもしれない。経験から言えば、長い嵐と座礁の末に再び浮かんだ船のごとき私のような者は、讚美歌にあるように「行く末遠く見るを願わじ」であり、また讚美歌462「主よ、水先のしるべしたまえ」と祈るばかりである。

「果てしも知れぬ浮世の海」、漕ぐしかない。でも主の導きを信じ、祈り、主を目当てに漕ぐうちに、きっと何時か・いつの間にか我々も着くのだろう。「どこかに」ではない。目指す地に、着くべきところに。